

## 献辞

権上康男教授は、2006年3月31日をもって定年退職により本学を去られました。ここに『エコノミア』第57巻第1号を先生に捧げ、長年にわたる先生のご指導への感謝の気持ちを表したいと思います。

権上先生は、1941年2月13日、神奈川県にお生れになり、1964年3月に本学経済学部を卒業後、東京大学大学院に進まれ、経済史を専攻されました。大学院在学中、1968年から1971年までフランス政府給費留学生としてパリ高等研究院 (Ecole Pratique des Hautes Etudes) 第六部門、パリ第8大学に留学し、1972年に母校に助教授として戻ってこられました。

以後、先生は本学にあって研究教育および行政に全力を尽くされるとともに、フランスはもとよりヨーロッパでも最も評価の高い大学院大学である社会科学高等研究院 (EHESS) 客員教授として教えられるなど、経済史分野における国際的な研究者として活躍されてきました。

先生の経済史研究の大きな特徴は、フランスの公文書を丹念に調査・収集し、それに基づいて歴史を明らかにするというににあります。権上先生が東大大学院において研究をされていた当時は、特定の歴史像が先にあり、それに基づいて歴史を研究するというスタイルが西洋経済史においては主流でありました。先生は、フランス留学での経験を契機として、膨大な一次史料に基づいて歴史を明らかにするという研究スタイルを確立し、日本のみならずフランスでも高く評価されるフランス金融史に関する優れた研究業績を挙げられました。東京大学博士論文である『フランス帝国主義とアジア——インドシナ銀行史研究』(1985年)、日経経済図書文化賞を受賞した『フランス資本主義と中央銀行——フランス銀行近代化の歴史』(1999年)において、公文書から明らかとなる歴史が従来の歴史研究における通説的な見方とは全く異なる点が多いことを、説得的に論証され、内外の学界に大きな影響を与えました。『フランス帝国主義とアジア——インドシナ銀行史研究』が*Banque coloniale ou banque d'affaires: la Banque de l'Indochine sous la IIIe République* (1993)としてフランスでも刊行されたこと、2000年1月にパリで開催されたフランス中央銀行創設200周年記念国際シンポジウムにおける報告などからも分かるように、先生の業績はフランスでも極めて高く評価されております。

教育面では、学部および大学院での指導を通じて、学界で活躍する優れた経済史研究者を育成されております。学内の行政面でも、経済学部貿易文献資料センター長、評議員、附属図書館長等を歴任され、大学の行政運営面でも大きなご貢献をされ、学外にあっては政治経済学・経済史学会(旧土地制度史学会)理事、日仏歴史学会理事、日本学術会議研究連絡委員、文部省学術審議会専門委員などを務められ、本学のみならずわが国全体の研究教育のあり方に大きくご貢献されています。また、自身の歴史研究を通じて、フランス等のヨーロッパと比較して、我が国における公文書保存の重要性に対する認識の低さを痛感され、日本における公文書の整理保存体制の整備についても積極的にご発言をなされ、この面でも大きな貢献をされています。

権上先生によって、横浜国立大学における経済史研究は国際的水準に引き上げられたのであり、先生は経済学部の研究面での国際化の推進者であったといえましょう。先生が、新たな場で、一層のご活躍をなさることを心からご祈念申し上げます。

2006年5月

経済学部長 秋山 太郎